

ツーリズム立国としてのポルトガル-歴史的かつ日本との対照において-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長尾, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5620

《個人研究》

ツーリズム立国としてのポルトガル
——歴史的かつ日本との対照において——

長尾史郎☆

Tourism: a Major Industry of Portugal In its Historical Perspective
and in Contrast to Japan

Shirō NAGAO

0. 始めに⁽¹⁾

筆者が始めてポルトガルに接することになった態度は、ある意味で「旅人」のそれであった⁽²⁾。ここでツーリズムの問題を主題に選んだのは、そうした一介の「ツーリスト」としての自分の想いと関連させてかの国を論じたいということがその動機であった。さらに幸いなことに、在外研究の報告で選んだ、かの国の思想家フェルナンドゥ・ペソアが面白い形でこの問題に関わっていたからでもあった⁽³⁾。

仮りに筆者がポルトガルでなくて、他のある外国を選んでいても、問題提起自体は変わらなかったはずだ、と一応言えようが、しかし必ずしも、独立のフォーマットがあって、それはどの国にも適用可能だという訳ではなく、どうもこの問題に想い至るにはポルトガルを要したのだ、などという思いが浮かぶのも、偽らざるところだ。このような動機に基づくのであるから、得られた結果は、予想されるように〈エッセー〉のような体裁になったのは止むを得ない。

1. ツーリズムの意味

ツーリズムがどのような意義を帯びているかは、誰にとってかという点で千差万別であろう。旅行する側だけとっても、単なるレジャーから、教養を深め、ないしはフィールドワークを兼ね、あるいは「国際親善大使」を気取る者もあろう。また、経済活動と裏腹に行われる旅行もあろう。滞在期間や様式さえ、以上のような動機と結びついてくる⁽⁴⁾。

1-1. ツーリズムの「当事者」

まずツーリズムに関わる主体を列挙してみよう。念頭にあるのは主として国際ツーリズムである

☆本学経営学部教授

が、国内ツーリズムとの関連が切っても切れないし、また、多くの議論は両者に共に妥当するだろう。

だから、関連主体と言っても、もっぱらないし主としてツーリズムに関わる者の方が少ないとさえ言えるかもしれない。その点から言えば、あらゆる主体がツーリズムに関わるのである。だが、そう言ってしまっただけでは何も出来ないのだから、ある程度の限定を加えておこう。

1] ツーリスト自身

2] ツーリストを送り出す国

3] ツーリストを受け入れる国

2a] // の国民

3a] // の国民

2b] // の政府

3b] // の政府

2c] // の業者

3c] // の業者

1-2. ツーリストとは誰か？

これらの主体のうち、ツーリスト自身はまず容易に了解しえるだろうと思われよう。だがそれほど簡単でもないようだ。万能の論議をここに持ち出せば、ツーリストは自分が国内・外国の観光地を訪問しているという事実は自覚し、まあ疑い無いとしても、それでは、どういう行為がツーリズムと呼ばれ、何を求め、また何を得て帰るかは必ずしも自覚していないか、自覚し得ないだろう。つまり、ある個人がツーリストであるかどうかは、自他の認識で異なり得るのだ。あるいは、人はどの程度、どの範囲で、どこまで、どの意味で、等々、ツーリストであるか？ ということになる(5)。

アーリ ([Urry, 1990], pp. 252-3) によるとツーリストの像は大衆観光の開始以来、夫婦から始まり、それに子供が加わり、ついで子供中心に移って来たという。イギリスの業者の考える広告のツーリストのイメージには次のような分類があるという (*Ibid.* より整理)：

男	女
夫婦 + 2～3人の子供 (ロマンチック旅行)	
夫婦 (除：子供) / カップル (遊興旅行：同性団体 / 異性を求める)	
男性グループ	女性グループ
(含：セックスツアー)	

[除外] 有色人種(6)

黒人 (除：エキゾチックな対象として；海外からの客)

アジア人種 (除：従業員；海外からの客)

1-3. 旅行業者

他方、上述のような志向ないし動機を持ち旅行するツーリストを対象にする関連諸主体の関心もまた様々であり、ツーリスト自身よりもっと曖昧だ。そのうち、「業者」と言われる人々も、狭い意味のツーリズム業（旅行代理店、宿泊業者、運輸交通業者、両替業者、ガイド等々）は比較的明瞭であるが、その外延と内包は曖昧である。例えば、商業はどこまでがツーリズム業だろうか？ 出版業は？その他、保健、レジャー、等々、どの業種も部分的にはツーリズム業である。学校でさえ無関係でない（明白な形は「語学ツアー」だが）。そして、それらサービス業に納入する財のメーカーは？、等々。

2. 社会とツーリズム

「主体」と言っても、現代社会の主体は機能の束に過ぎない。どの側面における主体が影響を受け、関与するかがまた問題だ。

直接にツーリストの懐を狙う業者にとって、事態は明瞭で、ただ経済的側面だけでこの問題に触れるだけである、と殆ど断定したくなるかもしれない。少なくとも業者の意識の大半においてはそうだろう。しかし、それが目的だとしても、そのためにツーリストのどの動機に対応し、あるいは彼らの動機を開発し、引き出し、インセンティブを与えるかということになると、問題は既に「経済」を外れる。上述のように多様なツーリストの関心は「経済」の枠には収まり切らないのだから。

逆に、そうした業者は、自分の経済以外の領域にスピルオーバーしたツーリズムの影響を評価し得ず、あるいはそれに無関心であることが多いだろう。しかし、それは明らかに存在する影響だ。だから、上述のどの当事者でも、ツーリズムの持つ真の、あるいは全面的な影響は知り得る立場にないか、あるいは仮りに知るつもりなら知れても関心がない、等々の状態にあるだろう。

だから、——意味的・時間的・空間的に——極めて限定された意味でしか、ツーリズムの「主体」なるものは存在しないし、また同じ意味で、ツーリズム問題それ自体という独立の領域も存在しないのだ。

つまり、ツーリズムという新たな社会的な問題が生じているということだけでなく、むしろ、依然として同一である広義の社会問題全体にツーリズムという事象が加わっていると考えるべきであろう。

しかし、ツーリズムは旅一般のことではなく——それは古代からある——ある歴史的刻印を帯びた旅だ。すなわち、例えばかつての貴族の子弟のためだったグランド・ツアー（[Brendon; 1991], pp. 25-27）ではなくて、大衆観光（popular tourism）（p. 16）であり、大勢で行く組織観光（p. 16）である。それは、鉄道革命に裏付けられ、トマス・クックらにより開発された大衆（マス）ツーリズムである（p. 34）。

3. 政治とツーリズム

このように、社会的な事象としてのツーリズムは社会のあらゆる機能に関わるから、当然、政治にも関わる。しかし、その側面への注目が比較的希薄であると Hall [1994] は嘆いている⁽⁷⁾。それは、

そのことに注目する研究が少ないという意味でもあれば、政治がそれに気付くことが少ないということでもあるが、Hallは主として前者を強調する。つまり、政治の側は、ツーリズムをそれ自体として育成するために行動することもあれば、また、本来は非政治的な事象であるツーリズムを政治的目的のためにも使うことがある。それは、特に権威主義的政治の下（個々の国々——例えばかつてのポルトガルやスペインの独裁体制——や、旧東欧諸国）では、この点で顕著なものがあつたが、それは、政治目的への利用の必要性、および政治目的への「転用」の可能性から説明できよう。しかし、それは必ずしも「非政治的」なツーリズムにとってマイナスであるとは限らない。後述のようにポルトガルはその例になっている。

後述のように、ここでも上述の一般的問題が関わる。すなわち、ツーリズムそれ自体というものは無いということだ。一見して直接にツーリズムに関わる政治——交通・通信・宿泊施設・観光スポットの整備、等々に関する行政——は確かにツーリズムを促進するだろう。しかし、例えば治安の向上、教育水準の改善、生活水準の向上などはツーリズム行政そのものではない。だが、これらがある国のツーリズム的魅力の大きな要因を成すことが知られている。

3-1. ポルトガルのツーリズム政策

ポルトガルの観光政策は、例えば次のような計画（国家ツーリズム計画：Plano Nacional de Turismo 1986-89）として発表されている（[Hall, 1994], p. 113-114）：

「1. ツーリズムを振興し、国際収支改善に寄与するための施策：

(a)外貨の受取りを増やす；(b)稼得を増やす；(c)外国投資を増やす

2. 地域開発を促進するための施策：

(a)ツーリズム開発のための優先地区を創造；(b)温泉町の開発；(c)地域開発に資するような諸措置の実施

3. ポルトガルの生活の質の向上のための施策：

(a)国内ツーリズムの振興；(b)アグリツーリズムの振興⁽⁸⁾；(c)「居住性ツーリズム」⁽⁹⁾；(d)ソーシャル・ツーリズムの支援

4. 自然的・文化的遺産の保存のための施策：

(a)ツーリズムと諸他のニーズの間での空間のよりバランスのとれた利用の組織化；(b)自然環境の保護、殊に沿岸地方における植生の保護；(c)特定諸地域におけるツーリストの適正数の規定；(d)地域的および都市部の伝統的建築物の保護；(e)記念物の保存；(f)民芸技術の振興と民間伝承の支援」。

このように、言わば総花的に目標が掲げているが、本音を言えば、第一の目標、つまり国際収支改善に圧倒的な比重が置かれていることは否めず、またこれは何もポルトガルに限ったことではないようだ（*Ibid.*, p. 114）。もっとも、他の諸目標が蔑ろにされているという意味では必ずしもないが、ただそれらでさえ、結局は経済的目標に資するから（その限りで）尊重されるという面が大きいことで

あろう。

3-2. 政治体制とツーリズム

ポルトガルの政治史のハイライトは、四〇年近く続いたサラザールの独裁体制を倒し、それに引き続いて起こった一〇年前後続く目まぐるしいばかりの勢力・政権交替、およびその結末としての、左翼政権を経てのポルトガルの植民地放棄と西欧型の議会制民主主義の確立に導いた起点となった1974年4月25日の軍事クーデター（「カーネーション革命」）とであろう⁽¹⁰⁾。

本論はこの経過自体がテーマではない。むしろ、それ以前が問題になり、また、その経過に伴ってツーリズムがどのような影響を受けたかが問題であり、他方ではより一般的に政治体制とツーリズムの関係が問題になる。特にこの場合には、独裁（専制）政治とツーリズムの関係が問題だ。これは、他の国々（ヒトラーのドイツやフランコのスペイン）でも一般に問題になるだろうが、しかし、ポルトガルの場合には、もっと密接な関連がある。

ポルトガルの独裁体制の特徴の一つはその「内向性」である（ただし、世界最古の植民地は「国内」と見なすのだが——次節参照）。その結果としての自給自足的経済の確立のための産業基盤の一つとしてツーリズムに着目されている。事実、ポルトガルのツーリズムの興隆はサラザール時代（1960年代）に端緒を持つ（〔斉藤，1976〕，pp. 294-6）。

他方、ポルトガルに限らず、全体主義体制というものは自己栄光化のための記念碑好き、メガロマニアがあるものだが、ポルトガルもその例に洩れず、多くの記念碑を残しており、しかも、第二次大戦に参加していないので被害を受けずに残って、実用および観光資源として残っているものも多い。その中には、「伝統」の復活（再興）⁽¹¹⁾やマリア信仰の演出（国際的な巡礼聖地ファティマの創出⁽¹²⁾）などもあり、観光に資してもいる⁽¹³⁾。

3-3. 植民地とツーリズム

ポルトガルの独裁体制の特徴付けは色々あって、それとナチズムやファシズムとの差異が論じられたりしているが⁽¹⁴⁾、そうした特徴の一つに、攻撃的・外攻的でなく、内向的な体制であるというのがある。すなわち、外に向かって侵略を事とするのではなく、内部を固め、また保守的な文化・社会政策を採るといふのだ⁽¹⁵⁾。

しかし、ここで誤解し易いのは、ポルトガルが「内部」というとき、それは自分が「発見」し、領土に併合した世界で最も古い植民地も含んでいるということだ。そして、この独裁の打倒は同時に世界でも遅れた方の植民地解放をも意味したのだ⁽¹⁶⁾。

そのような世界史的使命の理念を表現したのが「ルゾトロピカリジモ (lusotropicalismo)」だ⁽¹⁷⁾。これは、征服した土地は、他の国の場合とは異なり、ポルトガルと一体をなした多民族国家だという位置づけであった（〔Manuel, 1994〕，p. 24, 46n. 18）⁽¹⁸⁾。

このように位置づけられた植民地でのツーリズムは活況を呈した。すなわち、植民地への出国者や

入植者がアンゴラ（250万人）やモザンビーク（120万人）に行き、他の植民地に例を見ないサービス産業、加工産業を造り上げ、建設業が栄え、ツーリズムはインド洋のリゾートまで拡張し、その他の一次産業も栄え、コーヒーはアメリカとオランダの外貨を稼いだ（[Birmingham, 1993] p. 176）。

さらに、植民地解放後、植民地の旅館業者が本土のツーリズム業にフラストレートされたエネルギーのはけ口を見いだした。彼らの緩い植民地的な習俗がこの業界に適していたのだ（*Ibid.*, p. 174）。

また、旧植民地側でもそれに呼応するものがあって、例えば旧ポルトガル植民地のカボ・ヴェルデ首相は第二回全国観光会議で挨拶して、やはり同国にとっての観光が戦略的産業だとしている [Vaiga, 1992]。

4. 目的地の経済的な豊かさとツーリズム——ツーリズムと経済、教育、文化

上述のように、ツーリズムと言えはまず経済的側面が念頭に置かれる——観光産業が概念されるからだ。しかし、その場合、まず目的としての経済 [的利益] が考えられるが、それとは別の方向で経済が関わる。それは、ツーリズムの背景としての経済的状況だ。

例えば、教育水準や経済水準が上がれば⁽¹⁹⁾、それはその国のアメニティを高め、国民のマナーも向上し、従って外国の観光客にとってより魅力的な目的地になるということもあるであろう⁽²⁰⁾。

ただし、マナーの良いのは好いものだが⁽²¹⁾、それと教育水準とは必ずしも比例はしない。さらに、裕福な国が観光客にとって快適かどうかは一義的ではないのだ。

4-1. 2つのツーリズム——〈貧しさ〉の魅力

ツーリズムの目的は上述のように多様であるが、この目的地の経済・生活水準との関係で言えば、乱暴な言い方をすれば、二通りある——一つは豊かさを見に行くこと、もう一つは貧しさを見に行くことである。尤も、ここには、上述の教育とマナーとの関係のように、一義的でない点もある。即ち、貧富の軸の他に、文化水準の軸があって、後者は、現在の経済水準でなく、むしろ過去ないし未来の経済水準と関連しているかもしれないのだ。

文化と経済のずれはさし当たり不問にして、ここでは言わば並行関係と見なしておく（あるいは、「文明」と「文化」が一致するようにつもりで話しを進める）。そうしておいて、上述の区別、つまり貧／富のどちらを見に行くかという問題を考えてみよう。

ツーリズムは快適さだけを求めて行くものではないから、この何れの場合も成立し得る。例えばかつての日本人が欧米を（ロンドン、パリ、ニューヨークを）目指したのは、明らかに高い文化・文明を求めてのことであった。この傾向は今でも続いており、各人がする初めての旅行の多くはこのタイプである可能性が高い⁽²²⁾。

もう一つの「貧しさ」を求める旅はどうだろうか？これは誤解と誤弊の多い表現ではあるが、避けて通れない問題を提起するのである⁽²³⁾。

そもそも、人が旅をするのは、多かれ少なかれ、あるいは何らかの意味で「差異」と「非日常」を求めて行くのである。それは、どこへ何をしに行くかを問わず、いやしくもツーリストの身分に身を置くことと同時である。エキゾティズムもその主要な要因だ⁽²⁴⁾。その点から言えば、それらが生ずるのが、「富んだ」訪問国からでも「貧しい」国からでも構わないわけである。ただ、ここに重要な非対称性が生じる。それは、文化・文明の平準化に関わる。

一般に、経済水準の向上は「近代化」と並行し、後者は文化の国際的均一化・平準化を伴う。一般に都市化と風俗の世界共通化である。

エキゾティズムを求めるツーリズムにとって、これはある意味で損失である。だから、貧しさそれ自体を楽しむというのは言い過ぎではあるが⁽²⁵⁾、豊かさがもたらすこの損失はやはり注目しなければならないだろう。

この問題に日本も明治維新前後に直面したはずだが⁽²⁶⁾、それは、日本の「国体」変革の根本方向の決定に関わるものであったが、同時にそれは、奇しくも近代大衆ツーリズムの国際的発展とも深く絡み合っていたのだ。

マスツーリズムの生みの親トマス・クックは1841年に活動を開始し、世界的規模で組織を広げていたが、1872（明治5）年に初の世界旅行の途次に日本訪問を訪問している。折りしも、日本は脱亜入欧か尊皇攘夷かという国体論争を戦わしていた。トマス・クックは日本の風光を賞でつつ、日本の近代化に期待と賞賛を送った（[Brendon, 1991], p. 7）。それと同じ頃、やはり日本を訪れていたラドヤード・キプリングは、日本の近代化にその文化的アイデンティティーの喪失を危惧した。これは、開発かエキゾティズムかという対立でもある。クックの立場は進歩派の伊藤博文と気脈の通ずるものであった。事実、クック社は伊藤の助けを借りて横浜に支店を開設している（*Ibid.*, p. 8）⁽²⁷⁾。

4-2. ポルトガルの発展水準とツーリズム

ポルトガルは貧しく、またそれとある程度比例して、教育水準の低い国である。国民の識字率も低い⁽²⁸⁾。

「開発」——全てがこの物差しで計られる現代では、政策も文化も、目標を明示せよと言われればこれを表明することになる。しかし、つとに、そして到るところで論じられているように、開発で失われることの何と多いことであろう。ツーリズムにとって、これは取り分け大きな痛手である⁽²⁹⁾。

4-3. 民芸とツーリズム

開発は生活全般に及ぶから、制度や暮らしぶりとともに、風俗、生産物にも及ぶ。例えば民芸品である。ポルトガルは有数の民芸（*artesanatos*）の産出国であると言えよう。

ポルトガルの代表的な民芸としては、陶器、織物（インドの影響を受けた毛・綿織りもの）、刺繍（特にマデイラ島の）、金銀糸細工（*filigrana*）、さらにピューター製品、木製品（調理器具・インテリア小物）、鉄製品（調理器具・インテリア小物、農具）、大理石製品（インテリア・建築素材）、陶

板（室内装飾用・インテリア）などがある⁽³⁰⁾。

しかも、それらの品々が単に土産物とか玩具としてでなく、実は「現役」の実用品として製作されていることが魅力の要点だ。しかし、この強みは同時にその弱点になる。例えば、陶磁器は、素朴な土器と言って好いようなものが生産されているが、これらは現在も健在であるが、実は次第に実生活上の実用品ではなくなりつつある。それも次第にスペイン等からの輸入品の、廉価で丈夫なものに代わられていく。すると、かつての製品はただ土産ないし玩具としてしか生存しなくなる。それは、かつて生存した生物の一種の「標本」のようなものになる⁽³¹⁾。このことは、ポルトガルに限らず、どこの国にも生ずることだろう。例えば、日本の伝統技術（および伝統芸能）についても多かれ少なかれ言えることだろう。だが、ここに大きな相違がある。それはまた、上述の「貧しさ」が介入してくる接点の一つでもある。

日本の伝統技術も——漆器であれ織物であれ何であれ——、後継者不足、市場不足、原材料入手問題、等々、様々な困難に曝されている。そして、それらの生き残りは、やはり、ある程度は「標本化」「土産化」「玩具化」によって可能になっている。つまり、ある意味で、実生活からの遊離化である。しかし、それでも日本の状況はポルトガルのそれとはかなり質的に異なっている。

日本の場合には、伝統技術は、なるほど庶民の生活に根ざしたレベルから地続きになってはいたが、それでも、それから遊離し、高級化して洗練された部分が、ある種の特権的需要に答える形で維持されてきた面があった。だからこそ、逆に、庶民レベルの技芸は「民芸」として、例えば柳宗悦やバーナード・リーチらによる発掘と再発見を必要としたのだ⁽³²⁾。そして、日本の伝統技芸は、日常生活の実用とは一応別の工芸・芸術などとして、独立の存在を確立していることが多い。

それに対して、ポルトガルでは、伝統製品は、始めから高級品ではなく⁽³³⁾、実用品であった。従ってまた、外貨を稼ぐことができる輸出品でもない。例えば日本の伊万里や漆器が輸出産業となり得たのとは異なる。

以上のようなことの帰結は、それら民芸品が実用品であることを止めるような生活様式の変化とともに、それらも民芸品であることも止める、つまり廃れ、生産されず、標本として博物館にのみ残るといことになる。ポルトガルの場合にも、例えば土製品ではミシュテリオ⁽³⁴⁾やローザ・ラマリャ (Rosa Ramalha) のように、クラフトだが一種芸術の域にまで達した作家がいるが、これらは孤立した存在であり、日本の益子焼きのような形の広範な運動のようには成長しなかった⁽³⁵⁾。

代表的民芸である土器／陶器⁽³⁶⁾については以上のような状況だが、他の品目についても似たような状況にあると言えよう。つまり、ポルトガルが開発されて「貧しさ」を脱するにつれて、これら民芸品は滅びる運命にある。しかも、日本におけるようには独立の存在を確立し得ずに消えていくという成りゆきになる。だから、これも「貧しさ」の産物である遺産のあるものが失われるものの例になるのである。

ところで、上述のことの一つの帰結なのだが、そうして日常生活から遊離化して残存した民芸が需要を見いだすのは外国人ツーリストの間であるということになる。なぜなら、——これも「貧しさ」

と関連するのだが——、貧しさから脱したばかりの国民は「貧しさ」と結びついた産物には関心を示さないか、あるいはむしろ忌避すらするだろう。それを再び美とか価値とかとして評価するには、その「貧しさ」からの脱出を遙かに超え出ている種の余裕が生まれるのを待たなければならないようである。民芸の再評価は明治以降半世紀経った大正時代まで待たなければならなかったし、日本の美の再評価には、「外」の眼、すなわちリーチとかフェノロサとかの外人の眼を通じる必要があった⁽³⁷⁾。フランスのジャポニスムも外人の眼を通じた日本の再評価であるとも言えないことはない⁽³⁸⁾。

そうした余裕の生まれるまでの自国民に代わって古い美を評価し尊重するのは、むしろ外国人である確率が高い。これも、単に経済的利益——内国的であれ、外貨獲得であれ——を求める手段としての民芸、伝統産業ということよりも、あるいはそれとともに、むしろ文化の守りとしての国際ツーリズムという側面がここにも現れるのだ。

4-3. 市場（いちば）としての都市

常設店舗の集合としての都市が常識の国から出て見て、幾つかの国を回って見て、都市とは何より市場（いちば）、それも常設店舗と言うより、共同市場のことだという感を深くした（しかし、逆に振り返れば、日本でも常設でない定期市が相当の存在を保っていることも知れるのだが）。その経験は、当のポルトガル、アラブ諸国、インドネシア（バリ島やティモール島）、さらにスペイン、イタリア、フランス等の蚤の市などに脈々として流れている伝統だと思った。その場合、露天における定期市も多いが、共同の屋根付きの施設に定期的ないし毎日定刻に開く形式も多い。それに、年に何度かの祭に並行して開かれる市も加わる。

このうち、公設の市場 Mercado は教区 (freguesia ; 【英】 parochia) 毎に置かれる。首都リジボアでは1992年現在、29を数える⁽³⁹⁾。

その他の小売り商業の形としては、スーパー、ハイパーメルカドも徐々に増えているが、その他コマース・センタ（セントロ・コメルシアル）という共同店舗の形態が、個人零細商店とともに主流になってきている⁽⁴⁰⁾。リジボア市内のサンタマリア・ドシュ・オリヴァイシュ (Santa Maria dos Olivais) という教区について⁽⁴¹⁾、以下のようなデータがある（1986/87年現在：[CML, 1989], p. 16）。

立地別商店数

	独立商店		セントロ・コメルシアル内		メルカド内		合計	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率	実数	比率
食品	56	73.0	4	5.0	17	22.0	77	100.0
非食品	58	62.0	33	35.0	2	2.0	93	100.0
合計	114	67.0	37	22.0	19	11.0	170	100.0

4-4. 開発とツーリズム

ツーリズムに関連して開発と言えば、まずそのインフラストラクチャ、つまり道路・空港・港湾等の運輸施設、ホテルなどの宿泊施設、さらに一般に観光スポットとそこへのアクセスの整備ということになる。

この関係が上手くいくケースでは、そうした設備の整備が住民の生活を向上させ、同時に外国人ツーリストを魅きつけ、外貨を落として行き、それがさらに開発を促進する、…という〈良き〉サイクルであろう。これがしかし上手くいかず〈悪しき〉サイクルに転化する要因は無数にある。上述の条件が実現しなければ、その一つひとつが裏目に出る。すなわち、開発が十分に行われぬか、あるいは開発によって観光地としての魅力が失われ、あるいは期待した程にはツーリストが集まらず、および／あるいはツーリストが十分に外貨を落としていかない、等々。そして、これらのどれもがポルトガルについては問題になっているようである。

ポルトガルのツーリズムの将来については楽観論もある。例えば、ポルトガル投資・観光・貿易振興庁 (ICEP) アジア・パシフィック代表 C. M. ドウ・オリヴェイラは、こう分析する ([日本経済新聞], 1993.7.13)。

すなわち、1992年の入国者数2000万人を超え、そのうちツーリストは約900万人で、対1980年比でそれぞれ2.86, 3.33倍である。1992年までの10年間のツーリストの増加率は年平均11.5%で、同期間の世界平均4.2%, ヨーロッパ平均3.5を大きく上回っている。これに伴い、観光収入の増加も、1980-91年の年平均(名目)で25% (世界全体 [9.3%] およびヨーロッパ [8.3%] の2.7~3倍)であった。ただし、これはポルトガル政府の宣伝の意味もあるので、楽観的に過ぎる観測かもしれない。

他方、過去35年間のポルトガル社会のトレンドを500個の指標を使って分析したリジボア大学社会科学研究所のパレット (Antonio Barreto) の研究のツーリズムに関する展望にはこうある：

「ツーリズムが今日よりも格段に発展するということは、そして、高い収益を供給し続けるということは、信じ難い。同様に、ツーリズムが内部で大いに発展し得て、そのため、人々がそこに留まるのに貢献するようになるというのも信じられない」 ([Rolim, 1995.8.19])。

辛口の見通しではある。

5. リゾート

リゾートという概念は、どうも日本および日本人には馴染まないのではないかという気がする。つまり、日本内外において日本人がリゾート・ライフを楽しみ、あるいは外国人ツーリストにリゾートを提供することの両方においてだ。

日本人自身について言えば、「ワーカホリック」に罹っておりその時間的および／あるいは経済的余裕⁽⁴²⁾がないためでもあり、従ってまたリゾートの概念が発達せず、従って外国人にそうしたサー

ビスを提供することも思いつかず、出来ず、あるいはそう努力しなかったのだろう。さらに、例えば地中海諸国のような気候条件が揃わない点もあろう⁽⁴³⁾。

リゾートの正確な定義は知らない。だが、少なくとも、リゾートの条件としては、長期滞在が可能で、その間、一定の休息ないレジャー活動を行うための自然的・人工的条件が揃っていること、とでも言えようか。フランス人が「ヴァカンス」と呼ぶ活動に関わる施設・環境のことを指すと考えればよいようだ（〔望月，1990〕p. 16）。それは周遊旅行でもなく、余暇（レクリエーション）やレジャーとは一致しない概念らしい（*Ibid.*, p. 16）。いずれにしても長期滞在型の保養地というのが最大公約数としてあるようだ（〔大野・佐々木・中山，1991〕, p. 14）。この場合、ヴァカンスにおいては、「長期」とは、最も普通には一週間を単位とした数であるらしい（〔望月，1990〕p. 17）。さらに、長期滞在というほかに、太陽へのこだわりが不可欠であるという（*Ibid.*, p. 15）。また、自然との接触体験を含む「体験」という教育的要素も重要だと言う（p. 18）。

だが、後者、すなわち何かをする所という面の強調は、ややもすると誤り易いかもしれない。というのは、日本人の感覚で言えば⁽⁴⁴⁾、むしろリゾート・ライフとは〈何もしないこと〉という側面が強いのではないか？レジャーに精を出すというより、日常の喧噪から離れて、静寂を楽しむという側面の無いリゾートは欠陥があるのではないだろうか⁽⁴⁵⁾。

5-1. ポルトガルのリゾート地

リゾート地を長期滞在型地区および関連レジャー施設・自然条件の総体だとして、観光地一般から区別して考えるとすると、ポルトガルのリゾートはどのような状況にあるだろうか？

そもそもポルトガルのツーリズムにおける強みはその自然にある。特にその海岸にある。北ヨーロッパのツーリストは主としてヨーロッパ内にあるこの海水浴場を求めて来ると言える趣がある⁽⁴⁶⁾。その海岸が豊かなところは従ってリゾートにも相応わしいということになる⁽⁴⁷⁾。そこで、ポルトガルでリゾートと言われる地域は大きく3つある。一つは、本土の南端の大西洋沿岸のアルガルヴェ（Algarve）の海水浴場中心の地域⁽⁴⁸⁾、首都リジボアの郊外でテジョ（Tejo）川沿いのエシュトーリル（Estoril）で、カジノ等を中心とする保養地⁽⁴⁹⁾、もう一つは離島で、同名のワインで有名なマデイラ（Madeira）である。

このうち、本土から飛行機で2時間程の離島マデイラ⁽⁵⁰⁾は国際的にも知名度が高く、他の地域より国際ツーリズム対象の比重が高い⁽⁵¹⁾。この島は特産のワインとともに、海はもとより、高山を含む自然の風光に優れ、気候穏和な所であり、かつ歴史的遺跡もあり、また古い民俗も残っている⁽⁵²⁾とともに、ホテルその他の宿泊施設も整っていて、かつ比較的廉価に宿泊できる、等々、国際的リゾートとしての長所を色々持っている⁽⁵³⁾。

にもかかわらず、この島が観光収入によって潤って経済的に豊かであるわけではない。逆に、これは開発の問題を抱えた地域の代表的なもので、それは、もう1つのリゾートのアルガルヴェも同様である。

ここにも、既に論じてきた〈貧しさ〉とツーリズムの問題が否応無く関わって来る。香港やマカオ、ないしハワイ（あるいは熱海）のようになったマデイラやアルガルヴェは想像し難いし、安易に想像したくはないのだ。

[参考文献]

- 伊沢 元彦, 1996, 『魔鏡の女王』, 読売新聞社
- 呉 善春 (オソンファ), 1995, 『スカート風の日本をめざす韓国の女たち』, 三交社
- 大野 隆男・佐々木勝吉・中山研一, 1991, 『リゾート開発を問う』, 新日本出版社
- 樺山 紘一, 1995, 『異境の発見』, 東京大学出版会
- 斉藤 孝編, 1976, 『スペイン・ポルトガル現代史』, 山川出版社, 東京
- 角本 良平, 1993, 『モビリティと異文化接近: 20世紀の日本の経験』, 白桃書房
- 成 美子 (ソンミジャ), 1990, 『歌舞伎町ちんじゃら行進曲』, 徳間書店
- 徳久 球雄, 1996, 『キーワードで読む観光論』, 学文社
- 豊田 有恒, 1996, 『韓国へ、怒りと悲しみ』, ネスコ
- 長尾 史郎, 1995:3., 『フェルナンドウ・ペソア: 祖国ポルトガルへの矜持と焦慮に引き裂かれた二十面相の思想家』, 『明治大学教養論集』通巻第278号 (石塚編『都市と思想家』, 1996に再録) (後者のページ数で引用)
- 内藤 嘉昭, 1996, 『観光と現代』, 近代文芸社
- 根元敬/湯浅学/船橋秀夫, 1995, 『定本 ディープ・コリア』, 青林堂
- 野々山 真輝帆, 1992, 『リスボンの春: ポルトガル現代史』, 朝日選書
- 福田 和美, 1996, 『日光避暑地物語』, 平凡社
- 松浦 寿輝, 1995, 『エッフェル塔試論』, 筑摩書房
- 望月 真一, 1990, 『フランスのリゾートづくり: 哲学と方法』, 鹿島出版会
- 山田 睦男, 編, 1989, 『概説ブラジル史』, 有斐閣
- 脇田 武光, 1995, 『観光立地論(1)』, 大明堂
- [無署名]
- 1995.6.3. 『観光立国のススメ』, 『日本経済新聞』
- 1996.5.26 『文化不在の観光大国はありえない』, 『日本経済新聞』
- Azevedo, Virgilio, 1996.8.24, "Turismo sem estrategia," *Expresso*.
- Birmingham, David, 1993, *A Concise History of Portugal*, Cambridge U.P.
- Braga da Cruz, Manuel, 1988, *O Partido e Estado no Salazarismo*, Editorial Presenca, Ltd., Lisboa
- Brendon, Piers, 1991, *Thomas Cook: 150 Years of Popular Tourism*, Curtis Brown (石井昭夫訳『トマス・クック物語: 近代ツーリズムの創始者』中央公論社, 1995 [引用ページ数は訳本])
- Calado, Jorge, 96.1.12, "No Tempo dos Ditadores," *Expresso: Revista*, Lisboa
- Camara Municipal de Lisboa [CML], ed., 1987, *O Comercio e o Desenvolvimento da Cidade*
- CML, 1989, *Conhecer Lisboa: Freguesia a Freguesia 1. Santa Maria dos Olivais*
- CML, Direção Municipal da Abastecimento e Consumo, ed., 1988, *Lisboa: Que Comércio*
- CML, Direção Municipal da Abastecimento e Consumo, ed., 1992, *A Organização no Comércio*
- Camões, Luís de., 1948, *Os Lusíadas*, Editorial Domingos Barreira, Porto
- Cassels, Alan, 1969, "Janus: The Two Faces of Fascism," in [Turner, Jr., 1975] (後者のページ数で引用)
- [Chatwin, Bruce], 1996.2.10, *Expresso*, Lisboa
- Consiglieri, Carlos, Abel, Marilia, 1989, *Os Lusitanos no Contexto Peninsular*, Editorial Caminho, S.A., Lisboa

- Contreas, Mónica, 1995.12.16, "Turismo em debate na Madeira," *Expresso*
- da Costa, João Alves, 1983, *Dorga e Prostituição em Lisboa*, Publicações Dom Quixote, Lisboa
- Epstein, Klaus, 1964, "A New Study of Fascism," in [Turner, Jr., 1975] (後者のページ数で引用)
- Ferreira, Hugo G., Marshall, Michael W., 1986, *Portugal's Revolution: Ten Years On*, Cambridge U.P.
- Freyre, Gilberto de Melho, 1933 [16ª ed., 1978], *Casa-grande e Senzala: Formação da Família Brasileira sob a Regime da Ecomomia Patriarcal*, José Olympio, Rio de Janeiro
- Governo Civil de Lisboa, 1991, *O Trabalho e as Tradições Religiosas no Distrito de Lisboa: Exposição de Etnografia*, Lisboa
- Gregorio, Nídia, Garrido, Álvaro, Lopes, Pedro Santos, 1992, *Ideologia, Cultura e Mentalidade no Estado Novo: Ensaio sobre a Universidade de Coimbra*, Faculdade de Letras, Universidade de Coimbra
- Hall, C.M., 1994, *Tourism and Politics: Policy, Power and Place*, John Wiley & Sons, Chichester, New York, Brisbane, Toronto, Singapore.
- Hespanha, Antonio Manuel, 1989, in Tilly, Charles, Blockmans, Wim P. eds., *Cities & the Rise of States in Europe, A.D. 1000 to 1800*, Westview P., Boulder, San Francisco, Oxford, 1994
- Hobsbawm, Eric, Ranger, Terence, eds., 1983, *The Invention of Tradition*, U. of Cambridge Pr., Cambridge, England (前川啓治, 長尾史郎他訳『創られた伝統』, 紀伊國屋書店, 1996)。
- Instituto Nacional de Estatística [INE] (Portugal), 1991, *Portugal em Números: 1991*, Lisboa
- INE, 1992, *Portugal Social: 1985-1991*, Lisboa
- INE, 1995, *Anuário Estatístico de Portugal*, Lisboa
- Koeber, Raphael, 1946 (『ケーベル博士隨筆集』, 岩波書店)
- Manuel, Paul Christopher, 1994, *Uncertain Outcome: The Politics of the Portuguese Transition to Democracy*, University Press of America, Inc., Lanham (Maryland, USA), London
- Maxwell, Kenneth, 1995, *The Making of Portuguese Democracy*, Cambridge U.P.
- Maxwell, Kenneth, Haltzel, Michael H. ed., 1990, *Portugal: Ancient Country, Young Democracy*, Woodrow Wilson Center P.
- Morris, James, 1979, *Heaven's Command: An Imperial Progress*, Penguin Books
- Morse, Edward S., 1917, *Japan Day by Day* (石川 欣一訳『日本その日その日』, 創元社, 1941 [引用は邦訳から])
- Nolte, Ernst, 1966, *Three Faces of Fascism*, New York, Chicago, San Francisco
- Payne, Stanley G., 1973, "Spanish Fascism in Comparative Perspective," in [Turner, Jr., 1975] (後者のページ数で引用)
- Pessoa, Fernando., 1992, *Lisboa: O Que o Turista Deve Ver (What the Tourist Should See)*, Livros Horizonte, Lisboa
- [Rolim, M.L.], 1995.8.19, "O País Real," *Expresso*, Lisboa
- Sampaio, Francisco, 1991, *O Produto Turístico do Alto Minho*, Região de Turismo do Alto Minho (Costa Verde), Viana do Castelo
- Saviotti, Stefano, 1995.12.16, Entrevista ao *Expresso*
- Segalen, Victor, 1929, *Équipée*; [1955] *Essai sur l'exotisme* (木下誠訳『<エグゾティズム>に関する試論／羈旅』, 現代企画社, 1995)。
- Sterne, Laurence, 1968, *A Sentimental Journey Through France and Italy with THE JOURNAL TO ELIZA and A POLITICAL ROMANCE*, ed. by Ian Jack, Oxford U. P.
- Turner, Jr., Henry A., ed., 1975, *Reappraisal of Fascism*, New viewpoints, New York
- Turner, Jr., 1972, "Fascism and Modernization," in [Turner, Jr., 1975] (後者のページ数で引用)
- Urry, John, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage Publications,

Ltd., London, Newbury Park, New Delhi (加太 宏邦訳『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと旅行』, 法政大学出版局, 1995 [引用は邦訳から])

[Vaiga, Carlos], 1992.10.22, "Turismo como sector-chave do desenvolvimento da economia nacional [II Encontro Nacional de Turismo," *Vozdipovo* (Republica de Cabo Verde) :

[無署名]

1987, *Guia Urbanistico e Arquitectonico de Lisboa*, Associação Arquitectos Portugueses, Lisboa.

[注]

(1) 筆者は、数年前に訪れた在外研究の機会を掴んで、英語圏以外、というくらいの規準で、言わば「出来心」でポルトガルという国に関心を寄せたのであったが、結果として並々ならぬ関心を正当にも得て、その継続として今回の社研特別研究へと進んだのであった。初めての国と言語に接するに当たって筆者が自らに課した「約束」は、この国を「全面的に」見てやろうという決心であった。語学についても、かつてのように、社会科学（もっと特殊には経済学）に役立つ限りでの語学という枠を破り、分野を問わず修得する、という目標を建てたのである（予想されたことだが、成果はお粗末極まるものではあるが、その方向で努力は継続している）。また、対象のフィールドとしても、ポルトガルの経済とか社会とかということではなくて、「何でも」見てこよう、一語で言えば「文化全般」を見て来ようという意気込みであった。そして、これも予想出来るように、そうしたスタンスは「広く浅く」ということにならざるを得なかったが、それは予想もしたし、意図したときえ言いたい面も無きにしもあらずだったのだ。

(2) ちょうどそのころ、日本は政府の後押しもあって、老後の海外移住という動きがあって（と言っても、それもそろそろ——れいによって——「流行」を過ぎていたかもしれないが）そうした動きの一環にポルトガルという国も含まれていたらしく、現地ですら（半）永久的ないし一時的に定住している邦人の相当数の人々と親しく接しさせて頂き、多大な便宜、恩恵、知見を得て、「遊学」の成果にどれほど資するところがあつたか知れない。感謝とともにこれを記す。

他方、自分が将来、かの地（ないしその他の外国）での定住を希望するかと問われれば、まずほとんど確定的な「否」が答であろう。

(3) [長尾, 1995, 1996 ; Pessoa, 1992]

(4) 詩人 B. チャトウィンは、人間は生来遊牧的で善であるが、それが定住によって悪を身に着ける。そこで都市の惹き起こす悪から解放し治癒させるのは、旅という「詩的な活動」しかないという ([Chatwin, 1996], p. 77)。

(5) コーエン (E. Cohen) は「経験的」「体験的」「実存的」というツーリストの類型をあげている ([Urry, 1990], p. 14)。ファイファー (M. Feifer) の「観光体験のうそっぽさにほとんど大喜びする」「ポスト・ツーリスト」の概念がある ([Urry, 1990], p. 21)。

ローレンス・スターンの【センチメンタル・ジャーニー】 [Sterne, 1968] は、「マン・ウォッチング」(後注6参照)の旅行書のジャンルに入るものだろうが、そこで彼一流の辛らつなユーモアをもって、旅行論を展開している。それは、旅行の動機・理由とそれに対応するツーリストの定義である [pp. 10-11].:

旅の理由	旅人の種類	備考
(1) 身体の脆弱、頭脳の薄弱	(1) 暇な旅人 物知りたがる旅人／ウソをつく旅人／誇り高い旅人／虚栄の旅人／怒れる旅人	
(2) 不可避の必要	(2) 必要に迫られた旅人 軽および重犯罪的旅人 不首尾な、また無垢な旅人	グランド・ツアーを含む

(3)単純な旅

(3)単純な旅人

独立に扱えない程の少数

(4)センチメンタルな旅人

- (6) ポルトガルも白人社会であるから、この分類との共通性もあるが、それにもう一つの事情が加わるようだ。それは、ポルトガル人が、特に南部に来る程、人種的にはアラブの血が混じり、純粋な白人の外観を呈しない傾向がある（後ろ姿の女性を眺めていると、身長のためもあって、日本にいるのと錯覚したことすら、筆者にはあった。ただし、最近では若者の身長増加が著しいし、さらに、髪を薄く染める傾向もあるようだ）。北部に行くと、白色でブリュネット（金髪やブンドは少ない）が多くなるような印象を受けた。そこで、この国のコマーシャル（ツーリズムを含む）のイメージは圧倒的に（日本のそれに負けないほど）、より「ヨーロッパ的」で「アーリア的」なものの尊重になるのは避けられないようである。

なお、これとは次元を異にする最近の現象であるヨーロッパに蔓延の兆しのある人種差別（ラジジモ racism）の問題もポルトガルに接近しつつあるようだ（*Expresso*, 1995.12.23, p. 102）。

- (7) 社会学・経済学的研究も貧弱だという評価がある（[Brendon, 1991], p. 17）。今手元にある [Urry, 1990] はツーリズムを哲学的・社会的・経済的に論じようとする本である。
- (8) agritourism. この語は agricultural (rural, farm) tourism（[Hall, 1994], p. 117-8）等と同義であろう。日本でも都市と農村との調和の理念に基づいたツーリズム開発に活路を見いだす動きがある（注44を参照）。
- (9) turismo de habitação. リゾート開発に当たる概念であろう。
- (10) 最近流行の感のある〈カオス〉理論を適用してみたくなるような典型的な展開を示した政治的経過は、過去のロシアやフランスの革命とも並ぶ見応えのあるものだ。この革命の特徴の一つは、その経過が世界の注目の中で進行した言わば「劇場型」の革命であったことだ。そのことが、同国が結果として比較的スムーズに西欧型民主主義に到達したことと関係があろう——何れの選択も国際的な支持無しには不可能だったのであり、他方、東側ブロックには既に外を援助する力が不足していたことがあった。このことと無関係でないが、この革命には、当事者が事後に、敵味方を問わず証言する機会が多く与えられていたという点でも特筆に値しよう。その点では、1980年代末のロシアの反共産主義（民主化）革命と似ている。それら証言を取り入れた分析が続々と出版されており、その意味ではまだ解明は終わってはいないとも言える。他方では、他ならぬそのクーデターの立て役者で若手将校のリーダーで圧倒的人気を博したのラマリョ・エアネシュ（Ramalho Eanes [1935-]）が近口中に行われる大統領選挙に撃つて出るという。文献として以下のものを参照した——[Braga da Cruz, 1988], [Ferreira, 1986] [Gregorio, Garrido, Lopes, 1992], [Maxwell, 1995], [Maxwell, Haltzel, 1990], [野々山, 1992]。
- (11) [Hobsbawm, Ramger, 1983]
- (12) 1917年3月13日に一寒村の三人の羊飼いの前に（次いで多くの村人に）処女マリアが姿を顕し、奇跡を行ったということで、ヴァチカンの承認する聖地になった。筆者も野宿して法皇の行幸した大祭に参加してみた（普段は閑散としているので宿泊施設が貧弱だ）。筆者の見聞では、ここは歴史と規模でサンティアゴ・デ・コンポステラに遠く及ばないし、やはりルルドにもかなり見劣りがする（大幅な開発計画が進行中というニュースも聞いたことがあるが）。これも、サラザール政権（および彼個人）とカトリックとの良好な関係を示す一例である。
- (13) ここには幾つかの皮肉な現象もある。リジボア市内を貫通する大河テジョ川に懸けた橋は「サラザール橋」と命名されることになっていたが、その直前に起きてその後継体制を倒したクーデター（「カーネーション革命」）にちなんで「4月25日橋」と名付けられることになったのだ。

1996年にイギリスを始めとして、独裁と芸術の関係に関する展覧会“Art and Power”がヨーロッパ諸国で巡回開催されていたが、これを紹介する [Calado, '96] は、ポルトガルが二重に無視されていると嘆いている——一つは、この巡回にポルトガルは入っていないこと、もう一つは、この展示の内容にポルトガルの紹介が希薄であることだ。

筆者のポルトガル人の友人に建築家がいるが、こうした遺物には嫌悪を露にすることが多い。ある公園の大記念碑の噴水に夜間照明すると言えば、あれは選挙の時の人気取りさと言う。極め付きはこうだ——首都にあるロザリオ・ドゥ・ファティマ教会はパルダル（「雀」の意）・モンテイロという建築家の作品だ [Guia Urbanistico etc.]。そこで、「パルダルと雀の違いは何か？」という建築家仲間の謎々——（答）雀は糞を上から落とすが、パルダルは下から積み上げる！ 閑話休題。

- (14) ノルテ [Nolte, 1966] はファシズムの色々なタイプを分類して、それを4つの段階に区別している。そのうち、伝統的権威、宗教、階級構造と運動との関係については、次のような分類がなされる ([Epstein, 1964], p. 7-8) : 1) 極めて伝統主義的な「前ファシスト」体制 (例: ホルティエー [ハンガリー], ピルスツキ [ポーランド], アレクサンデル [ユーゴ], サラザール [ポルトガル]); 2) より伝統主義的でない「初期ファシスト」体制 (例: フランコ); 3) 伝統主義的でない「標準ファシスト」体制 (例: ムッソリーニ); 4) 明白な反伝統主義的な「ラディカルなファシスト」体制 (例: ヒトラー)。
- (15) 教会との関係も概して良好で、サラザールが退陣して最後の段階になって始めて教会が支持を見限ったのであった (そしてそれが大きな痛手となった) [Epstein, 1964] も参照 (前注12)。
- (16) ポルトガルにとっての対外関係の重要性は色々な形で現れている。例えば、中世ポルトガルの発達の顕著な特徴は、首都リジボアを除けば、事実上都市が存在しなかったことであるという ([Hespanha, 1989], p. 184; 以下、同論文による)。ポルトガルはヨーロッパ世界の先進世界帝国主義国として、王家の財政を対外貿易 (主としてインド貿易) に依存し、その機能はリジボア市 [1551年の人口: 100,000人——ロンドン, ケルン, マドリより大きかった] 一つで満たしていた。従って、王権の中央集権化も進まなかった。その後発達した他の諸都市のうち、内陸部の都市 (サンタレーン [人口: 10,000人], エヴォラ [14,000人], エルヴァシュ [9,500]) は牧畜、農業、カスティリヤとの交易に依拠し、支配者は行政官、教会の便益の保有者、多少とも貴族化した地主であった。他方、沿岸諸都市 (ポルト [15,000人], ヴィアナ・ドゥ・カシュトロ, アヴェイロ, ラゴシュ [6,500人], ファロ, タヴィラ [7,500人]) は遠洋航海、沿岸貿易、大西洋貿易 (アソーレシュのポンタ・デルガダに到る) に依拠し、支配者は、職人、商人であった。リジボアはその行政機構において当時欧州一の大きさであった。
- (17) 「ポルトガル—熱帯主義」: “luso-” とは、ローマ時代以来、伝統的にポルトガルを表す “Lusitania” の語の接頭形。この地域は、現スペインとポルトガル北部に当たる他の2地域 “Taragona”, “Betica” とともにイベリア半島を構成する。だが、例えば, “Germania” 等と異なり、そういう名の種族が住んでいたわけではない ([Consiglieri, Abel, 1989])。なお、ポルトガル版シェイクスピアであるルイシュ・ドゥ・カモンエシュがヴァシュコ・ダ・ガマのインド遠征を詠いあげた叙事詩は、これに因んで [ウジ・ルジーアダシュ (Os Lusíadas)] と命名されている ([Camões, 1948])。
- だが、この考え方は、一方的な植民地支配のイデオロギーであるとは言いきれない面もある。ブラジル北部の開発に関わった社会学者 E. フレイレは ([Freyre, 1933]) ブラジル文化をヨーロッパ文化が熱帯に適応した「混血文化」の「熱帯ポルトガル文明」の例として評価し、さらにこれをポルトガル語圏アフリカにも推し及ぼそうと試みた ([山田, 1989], p. 251)。
- (18) 尤も、白人の使命感の点だけ言えば、れいのキプリングの唱道したものを意識したという意味では他の国とは変わりはないとも言えよう ([Morris, 1979], p. 518)。
- (19) この両者の変化は同時でもないし、また常に一方が他方を先導するわけでもないし、また必ずしも共在することも保証されていないだろう。
- (20) この単純な命題もかなりの疑わしさをはらんでいる。確かに、教育が行き届き、マナーの良い国を旅行するのは快適である。筆者はポルトガルに滞在していて、そこから色々な〈ヨーロッパ〉の国々に旅行した。時々、ポルトガルは〈ヨーロッパ〉でないような口ぶりをして——単に自分の国のような気になってそういう言い方になったのだが——、ポルトガル人の友人に、「ここも〈ヨーロッパ〉ですよ」とやんわり皮肉を言われたものだった。しかし、当局者もそのように表現する (例えば、リジボア市長 ジョルジュ・サンパイオは、1998年の EXPO に向けての抱負の中で、同首都を「より快適で、もっと

「ヨーロッパ的な」都市にしたいと語る (*Diário de Notícias*, 1993; 日付不詳)。特に痛感したのは、郵便局のサービスの差で、ベルギーなどではポルトガルとの差を思い知らされて涙が出そうなほど感動した親切さであった。他方、ポーランドでは、警察官が中央郵便局の所在を知らないなどということもある。同じく、ドイツのレストランのウェイトレスの対応なども感動的だった。閑話休題。

実は、ここには、テクニカルに言えば、サービス産業としてのツーリズムの本質に関わることがある。つまり、サービス産業としては、生産と消費が場所的・時間的に切り離し得ないという事情があるからで、以上のような状況もツーリズムの品質の重要な一部分なのだ——「生産」の現場＝素顔を見せないわけにいかないのだ ([Urry, 1990] pp. 71-3, 120ff)。

- (21) ツーリズムの目的に関わることだが、ツーリストは人ではなく例えば自然を楽しみに行くということであろう。その場合、現地人はそのための補助、手段、便宜、等々になろう。あるいは、ショッピング・ツアーということもあって、人はひたすら商品だけ見るという場合には、やはり、現地人との関係は似たものになろう。この点で、観光を「まなごし」という視覚の問題だと捉え、それにとってはサービスは枝葉末節のことだとアーリはのべている ([Urry, 1990] p. 79)。

しかし反対に、〈人〉を見に行くこともある。この場合には、逆に、必ずしもマナーその他の好きは求めない。安全に関わるといささか問題ではあるが、それさえ含めて、そのマナーの在り方自体が観察の対象になるからだ。筆者が、大部及び腰で接し掛けている韓国について、その点で一種露悪的とさえ言える旅行記があるが ([根元/湯浅/船橋, 1995]), これなども端的に〈人〉見物だ。また、筆者が、ポルトガル語圏として視野に入れて訪問したことのある東ティモールやブラジルなどは、風物を楽しむというより、半ば命がけて〈人〉を見てきた、と言いたい気になっている。そして、メインのポルトガルでさえ半分ほどはその感を深くしている。もちろん、どの国の文化も人の創ったものだから、文化を見るときは〈人〉を見ることだ、といった迂遠な意味で言うのではなく、もっと直接に「マン・ウォッチング」するという意味である。ただし、マナーとは色々なシチュエーションにおける人の動きだから、風物や制度も見ることにはなる。このことと、ツーリズムが本質的に「現場主義的」なサービス産業であることとは切り離せない (前注20参照)。

- (22) しかしここには、単に〈豊かさ〉や〈先進性〉ないし〈文明〉だけでなく、例えば、エッフェル塔やエンパイアステートビルディングのように、「聖地」ないし特殊な「記号」を訪れるという意味があるかもしれない ([Urry, 1990], p. 21-22; 記号としてのエッフェル塔については [松浦, 1995] を参照)。
- (23) かつて (初めての南蛮人との接触、次いで明治における開国、更には、部分的には戦後の接触においてすら) 西洋人の眼に触れた日本の姿の多くは〈貧しさ—マナーの好き〉の組み合わせであったように思われる。〈教養〉ももちろんあったが、それとともに、〈無教養—マナーの好き〉という組み合わせも感動を与えたように思う (例えばケーベル博士は「車夫の走方」の「生れながらの優雅」について語り ([1946], p. 90), ポルトガル版ラフカディオ・ハーンたるヴェンセシラオ・モラエシユもそうした印象を語る)。モースも別の観察をしている ([Morse, 1917], p. 257-8; 日付不詳): 「福沢氏の有名な学校」で自然淘汰について講義した彼は、学生たちはその要点を実に早く捉えるのに気付いた。その訳を彼は、米国人と比べ、日本人は日本の自然についての知識を遙かに多く持っていることに求めている (前者では、子供は昆虫の種について一〇位の名しか知らないが、日本では数百の俗称を知っており、また米国では昆虫学者しか知らないような構造上のデテールを日本の子供が米搗き虫について知っているのに一驚を喫している)。
- (24) ツーリズムの本質を、巡礼の旅と関連づけ、比較し、非日常を求めるものと規定する議論がある ([Urry, 1990], p. 18-19)。
- (25) もちろん、「貧しい」——種々の意味で、「素朴な」「原始的な」「野生的な」「貧しいけれども人情ある」等々等々の——生活の体験自体も貴重である。また、そういう国との為替レートや物価の差さえ、無視できない要因である。しかし、これらの裏側は、粗末な、危険な、不衛生な、貧弱な等々のツーリズム環境ということになる。「富んだ」国からのツーリストは、前者の「長所」を、後者の「欠点」

の無い快適な環境で味わうという贅沢も要求する。その結果は、一種疑似的な「古典」「伝統」の鑑賞ということになる。しかし、そうなると、それは単に外国人ツーリストのための問題ではなくて、そのホスト国自体にとっても重大な文化の保存の問題につながっている。[Hall, 1994], p. 118も参照。ここでは例えば韓国におけるキーセン旅行も例にあげてある。これは、単に〈貧しさ〉だけの問題ではないが、深く関わる（[呉, 1995]）。なお、ポルトガルにおける売春に関する文献としては [da Costa, 1983] がある）。

(26) [角本, 1993], 第1章。

(27) 日本についてもこの例のように、またクックの国イギリスとの関係ではもうとストレートに、これはツーリズムと政治が関わり合う例になっている。これについては項を改めて論じる。

(28) 不識字率は1960年に、地域により30~40%であったが（最高は島嶼のマデイラ）、1981年には15~25%になった（[INE, 1992], p. 36）。当然ながら、年齢別には高齢者が、地域別には地方（農村部）が高い。

なお、外国人ツーリストが接する人々という点でより密接に関連する、商業関係被雇用者についての1984年現在の教育水準の統計があったので以下に示す（[CML, 1987], p. 49より作成。制度は不詳なので直訳で処理）：

教育能力	卸売り業	小売り業
読み書き不能	2.1%	1.2%
読み書き可能	3.4	2.1
小計	5.5	3.3
初等教育	43.8	55.8
中等教育	16.6	18.2
小計	65.9	77.3
高校教育	17.1	12.6
商業学校	7.1	4.4
工業学校	2.7	1.2
農業学校	0.2	0.1
他の2次教育	0.9	0.6
中間教育	0.5	0.2
バカレラト	1.2	0.3
修士	2.3	0.8
その他/不明	1.5	2.2

筆者の私的な経験では、小売り、市場、食堂の若い店員からは眼に見えて低学歴のような応答が返って来るが（もっとも、あの国にはアジア人——特に中国人——に対する偏見と差別が隠然とあり、下手なポルトガル語を語る私はそれ相当の反応を受けたということもある——未だに多くの者にとっては、日本は中国の一地方という認識もある）、書店員はある程度教育を受けた者といった感触であった。なお、注39のデータは、さらにこの間の事情を語っている。

(29) 失われるのは人情だけでない。良い意味の〈素朴さ〉〈純朴さ〉が失われる。旅はある種の郷愁を求めるものであるとすれば、これは損失である。例えば、日本のように小さくかつメディアによる平準化の進んだ国では、地域差を求めることは次第に難しくなっている。それでも、やはり、地域の格差は（単なる差異だけでなく、それと共に、何らかの規準に照らしての格差）は残る。これはしかし単に〈悪〉であるばかりでなく、一つの〈救い〉でもあろう。日本の国内ツーリズムが抱える問題の一部はここにも関連しようし、またここに解決の鍵もあるかもしれない。

(30) 民芸ではないが、特産品と言うことになればワインとチーズが含まれよう（食生活については別に論

じなければならぬ)。

- (31) [Segalen, 1929]。実は、ツーリズム自体が「疑似体験 (pseud-event)」であって、提供されるアトラクションもリアリティーではなくて作り物だというブーアスティン (D. Boorstin) の説明がある ([Urry, 1990], p. 13)。さらに、それを一歩進めたファイファー (M. Feifer) の「ポスト・ツーリスト」の概念 (もちろん「ポスト・モダン」が下敷きの語だ) がある。これは、もう「観光体験のうそっぽさにほとんど大喜びする」のだ ([Urry, 1990], p. 21)。
- (32) 3年ぶりに日本を訪れたモースは面白い経験をしている ([Morse, 1917], p. 260; 1882.6.6の項): 骨董屋で陶器を探した彼は、「意外な状態」を見る。以前にはいっぱいあった面白いものが殆ど無く、彼はその原因を、茶の湯の復活と (茶入れが殊に少ない)、英国と佛国での、また米国にさえおける日本陶器の蒐集熱のためと分析する。
- (33) 金銀細工は始めから奢侈品であり、やや別だが、逆にこれはあまり広範な需要を見込めない。もっとも、例えば北部のミーニョ地方の風俗にあるように ([Sampaio, 1991]), 農婦の民族衣裳の盛装では胸いっぱい金の鎖を掛けめぐらすが、これなどが示すように金製品は装飾であるとともに、蓄財手段でもあったかもしれない。成美子(ソンミジャ) [1990] は、知り合いの華僑二世の女性たちが好んで金(ゴールド)を多く身に着け、しかも身に着けることで日方が減るのを気にするのを観察し、それを経済的用心と厄除けのためと分析している (p. 107)。いずれにしてもこれは、現代の普通のポルトガル人には関係の無いことである。
- (34) ポルトガル語で「ミステリー (Mistério)」というあだ名で (彼の生い立ちにそう感じさせるものがあって付けられたという)、七〇歳台だが、素晴らしく瑞々しい感性の素朴な製品で知られる。彼は文盲でこのあだ名のサインを自分の製品に刻むことだけできる。歴史上では、以前にラファエル・ボルダロー・ピニャイロ (Rafael Bordalo Pinheiro; 1846-1905) が、陶芸で独自の伝統を作り、カルダシユ・ダ・ライニャという温泉地の陶器産業を興し、国宝的な尊敬を恣にしている。また、*ゼ・ポヴィニョ (Zé Povinho)* (=「人民ジョゼ」) という国民的キャラクターの人物を創造し、その姿は今でもポルトガルでは、イギリスにとっての「ジョンブル」のような役割を担っている。彼個人の専門の美術館がある。その弟コロンバーノもポルトガルを代表する画家のひとりであった。
- (35) 前注のラファエル・ボルダロー・ピニャイロは例外で、ある程度の産業を興すことに成功した。
- (36) 磁器については、ヴィシユタ・アレグル (Vista Alegre) という代表的なボンチャイナの名窯があるが、国際的な知名度は大きくなく、経営も思わしくないようである。なお、筆者の経験では、アフターサービスも必ずしも親切ではないようだ。さらに、クリスタルガラスの有名な産地が一つある (マリニャ・グランド *Marinha Grande*)。
- (37) 同じく、日本国内だけとつても、古道具や民芸の価値評価は、それらが主として存在する農村・地方自身によるよりは、「他者」である都会の眼を要したのである。
- (38) 朝鮮の井戸茶碗の日本人を通じての「再発見」もその例になるだろう [豊田, 1996]。
- (39) [CML, 1992], p. 39, Quadro 2. 周知のように、教区は教会と行政が混合した地域単位である。しかし、市場は教区毎ではなくて、それらを幾つか合わせた地域に一つずつ配置されているようだ (教区数は54だから、約2つ弱の教区に一つの市場ということになる)。なお、現地人は市場を「メルカド」 (=マーケット) とは呼ばずに「プラサ (praça; [英] place)」と呼ぶ。

なお、公設市場の従業員の年齢・教育のプロフィールについて次のようなデータがある (*Idem.*, p. 42, Quadro 5)。

メルカド	平均年齢	不識字率	年齢>60歳の比率	最年長者
アルヴァラーデ	48.6%	23.8%	24.4%	78歳
アロイオシュ	50.8	28.9	24.1	89
ベンフィカ	47.5	16.0	18.5	75
ピシェレイラ	50.7	16.7	22.2	79

明治大学社会科学研究所紀要

ラト※	53.1	23.1	36.9	84
シャブレガシュ	50.8	10.0	20.0	64
平均	50.5	24.0	34.2	78.2

※ 因みに、「ネズミ」という地名のラト (Rato) は首都でも最も古い地区の一つで、偶々筆者が居住していたので取り分け印象深い所である。

- (40) デパートという形式と名称は無い。それは大きなセントロ・コメルシアルであるという了解であろう(だが、それは今度はハイパーメルカドにつながる)。
- (41) この教区の小売り店数は、リジボア全体の1.6%を占める ([CML, 1988], p. 39, Quadro X)。
- (42) 主因は時間的、および概念的なものであると思う。そうすることが求められれば、人はそのような制度を創り上げ、経済も工面するものであろう。ポルトガル人は比較的余裕が無いが、それでも長期滞在型のレジャーを目指す(ホテルでなく、親戚知人の家庭を利用するか、キャンプをすとかの工面をして)。
- (43) ポルトガルも地中海国家ではないが、大西洋に面し、また後述の離島マデイラを持って、リゾートのある条件は満たしている。
- (44) 日本のリゾート形成は、1987年の「総合保養地域整備法(リゾート法)」の施行後、主として開発型の展開を追及してきたと言われるが、その後、バブルの崩壊や、自然破壊の問題などがあって、大手企業が次々と撤退し、見直しを余儀なくされた。5年後の1992年4月には国土庁その他による「総合保養地域整備研究」が発足して見直しを始めた(['日本経済新聞』1992.4.17)。その後の展開は、中央主導から、地域密着型や環境重視型、都市・農村交流型に重点が移って動きが続いているというが、低調感は否めないようだ(['日本経済新聞』1995.1.16)。しかも、これらの動きには、外国人ツーリストへの魅力よりは、日本人にリゾートを定着させるという狙いが中心を成しているように見えるが、それは、供給の側からのアプローチだけでは無理かもしれない。その他、高物価・高費用経済のもとでは、海外旅行の方が安くつきかねないという事情も絡んでいよう。
- ここにもまた、官主導と相俟って、一斉に始めて一斉に消滅する一過性の流行に終わるといふ日本のお馴染みのパターンが見られるようだ。これは、例えばメセナのような動きにも言えよう。
- (45) しかし、そのいずれも特権的なものでない。静寂だとか「手付かずの」自然だとかに接したいという欲求もあれば、逆に「集合的」観光の欲求もある。それらはいずれもまなざしの一環でしかない ([Urry, 1990] p. 81)
- (46) 「ポルトガルは〈豊か極まり無い文化〉を持っていると言うのは事実に対応しない! 文化的性格の探索をすることに関心のある者はスペイン、イタリア、ギリシャ、ドイツ、フランスに行く。ポルトガルに来る者は中でも海岸を、そしてもちろんリジボア、を求めて来るのだ」 ([Rolim, 1995.8.19])。しかし、ポルトガル自身は、この専ら「太陽と海岸」に依存したツーリズムに危機感を抱いている——客の季節性と支出額の低さなどが響くからだ ([Azevedo, 1996])。
- (47) 海浜リゾートは、イギリスの「一九世紀の産業化」に伴う大衆ツーリズムの発展にとって、特別な意義があったという ([Urry, 1990], p. 29)。
- (48) かつてアラブ人の王国のあった土地で、レコンキシュタでも、最後まで征服されずに残った最南端の大西洋沿岸地帯("Al-" はアラビア語の定冠詞である)。大航海時代にはここにエンリケシュ航海王子の航海術と造船の学校があった。

最近の、あるスペインの分析者によるアルガルヴェの評価は次の通りである (*Expresso*, 1996.2.10) :

長 所	弱 点
治安	物乞いと行商（押し売り）
物価安	道路
黄金色の砂浜：大きく清潔	中心都市の都市化
食事	博物館および文化活動
休憩施設のサービスが極めて専門的	夜間の環境および娯楽
接客態度良好	単調な風景
ゴルフ場／海上遊覧	

この研究はスペインのパレアレス諸島を規準にとり、それとアルガルヴェ、グランカナリア島、テネリファ島、クレタ島、ソドス島を比較採点したものである。その成績は：

評価項目 採点（最善／より良い／同等／より悪い／最悪）

インフラストラクチュア (水の供給／電気／グリーン・ゾーン／バス／行商／ 道路設計・舗装・信号／空港の一般的状態)	より悪い
(医療サービス／都市化)	最悪
(街頭の治安)	より良い
(通信手段／タクシー／物乞い)	同等
ツーリズム資源 (海水の質／海浜の質)	最善
その他 (23指標中12：特に、風景／歴史的記念碑／博物館／ 民芸品／文化活動／娯楽)	より悪い
(植物相／動物相)	同等

パックスツアーの価格 (14日：110,200pta)	2番目に高い
総合	(テネリフに次ぐ；クレタが最低)
(30指標中16：特に、レストラン・バーの開店時間／ ツアー／娯楽の多様性)	より悪い
(レストラン・バー・カフェ・スポーツ港のサービスの質)	同等

(49) ここは大衆ツーリズム時代以前から、没落王侯貴族の小コロニーだった ([Birmingham, 1993], p. 174).

(50) この他にも、もっと遠い所にある火山群島のアソーレシュ (Açores) 諸島があるが、マデイラよりは訪れる人が少ないようである (次注51参照)。

(51) この島が長期滞在型のリゾートであることは、統計にも明瞭に出ている ([INE, 1991], p. 29 より)。

居住地別ツーリスト宿泊客数および平均滞在日数

滞在地／居住地	宿泊客数		平均滞在日数	
	1988	1990	1988	1990
大陸 (ポルトガル本土)	18,037,209人	20,193,859人	3.3日	3.2日
ポルトガル居住者※	5,656,935	6,369,815	2.2	2.1
外国居住者	12,380,274	13,824,044	4.3	4.2
アソーレシュ島	321,543	363,497	3.4	3.0
マデイラ島	2,910,537	3,256,178	8.3	7.8

※ポルトガル人および外国人 (大多数がポルトガル人)

以上のデータから知られる点を幾つかあげると：

1. 大陸の旅行者の多数は外国人である（島嶼でもそう言える）。
 2. ツーリスト数で見たマデイラ島の比重の大きさが分かる。
 3. マデイラ島が長期滞在型リゾートであることが分かる。
 4. 滞在日数は減少傾向にある。
- (52) 大航海時代の1418年に、アソーレシュ諸島と同じく、アフリカへの途上に発見されポルトガル人のみの植民により成立した文明。未だに山羊飼いがおり、独特の古い形式の家屋があるが、これはもう観光化しているようだ。本土とともに出稼ぎ者を海外に出してもいるし、また本土のポルトガル人の別荘地にもなっている。
- (53) 宿泊施設の状況を比べると (*Idem.*, p. 28)：

	宿泊施設数[1]		収容可能数[1][2]		ベッド利用率	
	1989	1990	1989	1990	1989	1990
ポルトガル全土	1,701	1,758	168,437	179,337	38.3%	39.3%
大陸(ポルトガル本土)	1,564	1,620	152,923	162,428	36.9	37.2
北部(ノルト)	402	417	24,285	26,113	29.1	29.3
中部(セントロ)	288	294	17,711	18,262	27.6	27.7
リジボアおよびテジョ川渓谷	461	464	40,447	41,815	39.6	39.4
アレンテジョ	76	81	5,559	6,079	36.9	36.4
アルガルヴェ	337	364	64,921	70,159	40.2	41.1
アソーレシュ島	51	53	2,765	3,490	31.8	29.9
マデイラ島	86	85	12,749	13,419	62.2	63.9

※ [1] 7月31日； [2] ダブルベッド換算ベッド数

ここから知られる点の幾つかをあげる：

1. 大陸に比べて、マデイラの施設の規模が相対的に大きい。
2. 施設（ベッド）利用率はマデイラが圧倒的に高い。
3. もう一つのリゾートであるアルガルヴェは、それより大規模施設があり、利用率は中間である。

※アレンテジョ (Alentejo) 地方は農村地帯で、開発に一番多くの問題を抱えている。

(ながお しろ)